



DALS ニュースレター No. 4

東京大学

21世紀COEプログラム

生命の文化・価値をめぐる「死生学」の構築

Construction of Death and Life Studies concerning Culture and Value of Life

2003年12月1日

目次

「死生学 Death and Life Studies」にプライオリティはあるか

小佐野重利

林雅彦編『生と死の図像学 アジアにおける生と死のコスモロジー』

長島弘明

研究会案内・報告

シンポジウム「関東大震災と記録映画～都市の死と再生」報告

高野光平

シンポジウム「死生観と心理学」報告

秋山茂幸・横澤一彦

Hugh Mellor 教授講演研究会「意思決定理論は何を語るのか」報告

一ノ瀬正樹

鈴木岩弓教授講演研究会「『あの世』からの眼差し 遺影を飾る死生観」報告

前川健一・島園進

ワークショップ「生命科学とスピリチュアリティ」報告

島園進

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/shiseigaku>

「死生学 Death and Life Studies」にプライオリティはあるか

小 佐 野 重 利

前号で予告したシンポジウム、講演会および研究会・ワークショップのすべてを、自画自賛と言われかねないが、無事成功裡に終えることができた。それとともに、本年度の主な公開研究事業は終了し、21世紀COEプログラム「死生学の構築」の世話人・事業推進担当者一同、一息ついたところである。目下、それぞれの成果をいろいろな形式で刊行することを計画している。本号には、9月以降に開催された公開事業の報告と併せ、初めての企画であるが、死生学に関連する短めの書評を掲載する。

ずいぶん昔のこと、イタリア政府給費留学生としてイタリア滞在中に国際学会に初めて参加した時のことである。専門が近い高名な東欧の大学教授の基調講演を聞いた後、昼のビュッフェの折、勇気を出してその教授に話しかけた。何を質問したのかはすっかり忘れてしたが、彼が最後に言ってくれた言葉 国際学会で一番大事なのは、会場の廊下での出会いと語りですよ、忘れないように。 だけは、記憶にはっきりと残っている。留学する学生たちにも、この言葉を何度か繰り返したことがある。

9月以降の公開研究企画に参加された方々も、会場の内外で、まったく新しい出会いや語らいの機会を持たれたことであろう。関東大震災80周年記念に因んだシンポジウムには、幼い頃父母から震災の体験を聞いていた年配者の参加もあり、生々しい記憶もよみがえった。また、死の恐れの原因、死生観の形成要因などに迫る心理学的アプローチの意義を垣間見たことであろう。あるいは、ハールバット教授の講演を聞いて、現代社会の重要な生命倫理問題に対して、従来の宗教上の慎重論の枠を超え、生命の尊厳に立脚するスピリチュアリティを視野にいれる議論の必要性を痛感し、生と死の営みを連綿と続ける自然そのものへの畏怖の念を取り戻すことがいかに必要かを考えさせられたことであろう。特に、会場での議論だけでなく、廊下や懇親会の折の語らいに参加することにより、「死生学の構築」参加者はより一層実りある機会に浴せたものと確信している。

第二部会（生と死の形象と死生観）の立場から、書評の対象には、死と生の図像学に関する論文集を選んだ。その中の江戸期の歌舞伎役者の死絵は、鈴木岩弓教授の遺影をめぐる講演研究会にも関連するであろう。ともあれ、今年は生と死に焦点を当てた美術史・文化史的な出版企画がやけに目立つ。例えば、雑誌『美術フォーラム21』8号（2003年夏）は、「<生と死>と美術」なる特集を組んだ。われわれの「死生学の構築」の事業計画とは恐らく関係ない自主企画なのである。かりに関係があったとしても、自然科学分野などで問題にされる知的財産所有権やプライオリティを、目くじらを立てて主張するつもりはない。それどころか、21世紀COE「死生学の構築」プログラムが、いかに現代社会のニーズに適したものであり、喫緊かつ焦眉の研究課題であるかを物語ってくれ、むしろ、良き賛同者がえられたことに感謝したくなる。

来年もそのような関連企画が目白押しとなって、「死生学」の学術的市民権獲得に貢献することを念じてやまない。しかし、それに負けぬように来年度の企画を練らなくては。

林雅彦編 『生と死の図像学』 アジアにおける生と死のコスモロジー

長 島 弘 明

本書は、日本をはじめとするアジアの死生観が図像にどう反映しているか、あるいは図像を手がかりに日本・アジアの死生観の本質がどこまで明らかにできるか、という強い関心のもとに編まれた論文集であり、林雅彦「アジアに流传する「生死輪」と絵解き」、金山秋男「絶後再蘇の構造 道元禅の展開」、高瀬多聞「天寿国繡帳小考」、渡浩一「串刺しの母 地獄図と目連救母説話」、徳田武「『二十四孝』の絵画二題」、同「『十便十宜図』を読む」、原道生「死絵」について 基礎的事項の確認」、池澤一郎「田能村竹田の題画詞」、林雅彦「『道成寺縁起』のことばと絵画 絵解きを視座としつつ」の9篇の論考を収めている。宗教学、仏教学、美術史、文学、芸能と、様々な領域の第一線に立つ研究者が、いずれも力作の論文を寄せている。26ページ、51図に及ぶ口絵をはじめ、各論考にもふんだんに写真図版が収載されており、文字通り「図像学」の名に恥じない論集の作りである。



明確な宗教画、あるいは宗教的な雰囲気をもつ絵画に限らず、絵画には人の生と死を素材とし、モチーフとしたものが多い。さらに言えば、人物画や風俗画などの人事にかかわる絵は、なにがしかの意味において必ず人の生死と切り結んでいると言っても過言ではない。一方、生と死をめぐる思想は、絵画や図像に凝縮され、また媒介される形で、われわれの前に満ちあふれている。生の享樂の思想が一枚の浮世絵に圧縮され、また一幅の地獄絵が現世と冥界のコスモロジーを開示することもあり得るのである。

日本の江戸時代文学を専攻する評者の関心から、二、三の論考を取り上げる。林氏の巻頭論文は、衆生が輪廻転生する様を描いた一種の説話画（図像）である「生死輪」の、アジアにおける流布・変容を詳述するが、おのずとアジア的なシンクレティズムの問題にも踏み込んでおり、興味深い。

徳田氏の「十便十宜図」についての論考、池澤氏の田能村竹田についての論考は、大雅・蕪村・竹田と、いずれも江戸期の文人を取り上げたものであり、また漢詩（詞）と絵の関係を深く追求した研究である。ことばと絵の拮抗する画賛の類を扱うことは容易ではないが、この2つの好論は、日中両国の文人における生のあり方の、共通性と相違点を見事に抉り出している。

原氏の江戸時代の死絵に関する論考は、今後の死絵研究の基礎となる重要なものである。死絵の定義・類型・成立基盤等々に言及しながら、具体的に数多くの事例を具体的に検討する。本来、死者を描くためのものであった日本の肖像画の伝統に位置しながら、江戸期の死絵（基本的に対象は役者）は、肖像画のそうした原質とは異質で、他の役者絵と同様に、役者の最新の情報を伝えるという意図があり、「死絵」という呼称に反して、基本的には役者の生の姿を描いたものと変わらないという指摘は重要である。生と死が厳然とした境界をもたず、一つながりであるようなこの時期の町人の心意の一面を、この死絵が示しているということになるだろうか（もちろん彼らにとって、生と死がいつも一つながりであったわけではない、念のため）。

ごく一端にしか触れ得ないことを遺憾とするが、本書に提起されている問題は、実にさまざまである。是非、通読をおすすめしたい。

（A5版 426ページ、至文堂、平成15年3月31日発行、本体9524円）

シンポジウム「関東大震災と記録映画～都市の死と再生」報告

高野光平

2002年8月30日、東京・京橋の国立近代美術館フィルムセンターにおいて、関東大震災80周年シンポジウム「関東大震災と記録映画～都市の死と再生」が開催された。

突然の大量死と破壊をもたらす大災害は、残された人々がそれらとどのように向き合い、慰霊し、そして復興へと歩むのかという点で、すぐれて死生学的な主題である。特に、1923年9月1日に起こった関東大震災は、その後7年間にわたって実施された一連の帝都復興事業とあわせて、都市の死と再生の過程を典型的に示した例として注目できる。

関東大震災と帝都復興事業は、当時まだ草創期にあった映画によって記録され、その一部が現存している。本シンポジウムでは、これらの映画の上映を行い、それを手がかりに議論を展開する形をとった。会場となったフィルムセンターは、国内映画フィルムの保存と公開、発掘と復元、研究と分析などを行う機関で、今回上映した映画はすべてセンター所蔵の作品である。

さて、事前に東京新聞で紹介されたこともあって、当日は大変な盛況であった。親から伝え聞いた震災を一度動く映像で見たいというお年寄りも多数訪れ、150席の小ホールはほぼ満席になった。

第一部は、『関東大震災大火実況』『関東大震災[伊奈精一版]』『猛火と屍の東京を踏みて』の3作品を上映した後、3名が報告を行った。成田龍一氏「震災と都市の死」では、震災の新聞報道がどのような段階を経て行われ、どのようなアイテムによって描写されたかを具体的に追いながら、震災のリアリティと物語がメディアによって構築されていくプロセスを分析した。とちぎあきら氏「大震災が映画表現にもたらしたもの」では、震災映画が実際どのように撮影・制作されたのかを説明しつつ、それが後に成立する記録映画・ニュース映画の手法の萌芽を含んでいることを指摘した。佐藤健二氏「震災と視覚メディア」では、映画以上に人々に普及した「震災絵はがき」と、不逞朝鮮人に代表される「流言」を例示しながら、錯綜し断片化した情報から人々が何を求め、何を求めることができたのかを考察した。

第二部は、『帝都復興』の一部を上映した後、2名が報告を行った。原武史氏「帝都復興祭と都市の再生」では、フィルムに映された宮城と天皇の姿に注目し、震災映画と復興映画におけるそれらの違いについて論じた。木下直之氏「死者の行方」では、死体/死者がどのように扱われたのかを、報道用語・各種法要・慰霊堂の建立・復興祭での天皇巡行経路などから多角的に分析した。

本シンポジウムの特長として二点挙げられよう。第一は、震災と帝都復興とを対にして捉えたことで、これは非常に斬新な視点だと自負している。この着想は「死生学」というコンセプトから導かれた。第二は、映画を補助線にしたことである。国立の収蔵機関が特定団体にこうした協力を行うことは制度上難しいのだが、フィルムセンター研究員・常石史子氏の尽力によって実現した。記して御礼申し上げたい。

一方で、上映と報告に時間がかかりすぎ、ディスカッションの時間がほとんどとれなかったことは反省点である。また、サイレント映画の長時間の上映は、参加者に多大な負担を与えることも、今度の課題として銘記しておきたい。

日時	2002年8月30日(土) 10:30-18:00
会場	東京国立近代美術館フィルムセンター 小ホール
主催	東京大学文化資源学研究室 東京大学 21世紀 COE「生命の文化・価値をめぐる<死生学>の構築」研究拠点
協力	東京国立近代美術館フィルムセンター
後援	文化資源学会

第一部	関東大震災の記録映画上映 ・『関東大震災大火実況』(64分、東京シネマ商会、1923年) ・『関東大震災[伊奈精一版]』(9分、伊奈精一監督、1923年) ・『猛火と屍の東京を踏みて』(10分、ハヤカワ藝術映画制作所、1923年) 上映映画に関する解説 = 常石史子(東京国立近代美術館フィルムセンター)
	報告 「震災と都市の死」 = 成田龍一(日本女子大学) 「大震災が映画表現にもたらしたもの」 = とちぎあきら(東京国立近代美術館フィルムセンター) 「震災と視覚メディア」 = 佐藤健二(東京大学)
	ディスカッション
第二部	帝都復興祭の記録映画上映 『帝都復興』(松竹キネマ・大日本教育映画協会・復興局、1930年)より 「震火災編」(9分)「完成編」(一部、30分)「御巡幸編」(15分)「完成式典編」(9分) 上映映画に関する解説 = 常石史子
	報告 「帝都復興祭と都市の再生」 = 原武史(明治学院大学) 「死者の行方」 = 木下直之(東京大学)
	ディスカッション

シンポジウム「死生観と心理学」報告

秋山茂幸・横澤一彦

本シンポジウムは、日本心理学会第 67 回大会と共催で公開シンポジウムとして開催され、当日会場には日本心理学会会員ばかりでなく一般の方も含め、全国各地から三百名以上の方々にお集まり頂きました。

最初の話題提供者の島蘭進先生(本COE拠点リーダー)の講演は、「死生観の心理学の可能性 —ケア実践的知/歴史文化研究/実証科学—」と題し、まず死生学と心理学の関係をケア実践という観点でつなぎ、さらに文化研究、また実証研究として発展させていく重要性を強調されました。



次に、金児暁嗣先生(大阪市立大学)の講演は「宗教観と死への態度」と題され、社会心理学もしくは宗教心理学の立場からわれわれの持っている死への態度(死観)の形成に関するプロセスと要因の分析に基づくものでした。「オカゲ」と「タタリ」の観念を中心に、浄土真宗の死観を加味しつつ、宗教観と死生学の関連を問うものでした。

そして、杉下守弘先生(東京福祉大学)の講演では、神経心理学の立場から見える生と死の現象に関する報告がありました。幽体離脱や臨死体験といった現象に対する近年の心と脳に関連する研究を引用しながら、それらと宗教などにおける議論・認識との距離を意識しつつ、批判的なスタンスも含んだお話がありました



最後に、辻敬一郎氏(中京大)からは「生命観へのアプローチ —基礎心理学の立場から—」と題した報告がありました。心理学の研究テーマとして死生観を取りあげるとき、生活史の諸体験を通じて形成されるとの立場から生命観を取り上げることの意義、そして生命観の形成過程などについての仮説的な説明が

行われた上で、心理学の領域連携の重要性について示唆がありました。

講演後の質疑応答では、現代社会における新しい死のかたちの問題や、死生観における普遍主義と（文化）相対主義、生や死の体験主体としての意識の問題、死生学に内在する評価や価値に関する反省的認識などについて活発な意見交換が行われました。全体を通じて、多様な議論が展開され非常にヴォリュームのあるシンポジウムとなりましたが、それは心理学という領域・方法の多様性を改めて如実に感じさせるものでした。異質な研究領域が交叉することによって、参加者に死生学研究の重要性を問いかけるようなシンポジウムであったと感じています。

本シンポジウム開催にあたり、日本心理学会第67回大会準備委員会及び本シンポジウムの多くの方々にご協力頂きましたが、学会とCOEのコラボレーションの新たな可能性を示すことができました。関係されたすべての方々に、感謝の意を表したいと思います。

Hugh Mellor 教授講演研究会「意思決定理論は何を語るのか」報告

—ノ瀬 正樹

去る2003年10月7日、東京大学山上会館2F大会議室において、「Hugh Mellor 教授講演研究会・「意思決定理論は何を語るのか」(What does decision theory tell us?)」が開催された。講演は午後五時で、会場には70人を越える聴講者が詰めかけた。平日火曜日の研究会であり、しかも主題が専門的なものであったことを鑑みると、大変に盛況であったと言える。Hugh Mellor氏は、ケンブリッジ大学教授であり、時間論、確率論、因果論、意思決定理論などの、科学哲学や形而上学の分野で、現代哲学に重要な足跡を残してきた哲学者である。講演は、「意思決定理論」に関して、従来のスタンダードな見方に対するかなり大胆な改訂を迫るもので、大いに刺激的であった。「意思決定理論」とは、不確実でリスクな状況下でどのように決断していくことが合理的か、という問題を扱う分野で、主として経済学において「ゲーム理論」との交錯の中で論じられてきたが、哲学においても、「合理性」、「効用」、「確率」の概念の意義を洗い直す格好の題材として早くから主題化されていた。さらには、今日では、「意思決定理論」はさまざまな分野への応用が模索されており、なかでも「医療における意思決定」という形で、診断、治療、患者の側の選択、などの医療の問題に應用が試みられている。また、その他、死刑制度、安楽死法の制定、核武装、といった問題への適用も考えられる。本COE「死生学の構築」が理論的に深化していくためには、ぜひとも目を配るべき分野である。今回のMellor教授の講演は、これまでの「意思決定理論」のスタンダードが、「確率」を「主観的」に解釈した上で期待効用最大化原理といった考え方を「規範的」な指標として提示する、といったものであったのに対して、「意思決定理論」における「確率」を（そして「効用」も）「客観的」に解釈して、しかも「意思決定理論」全体を「記述的」な議論を展開するものとして理解すべきだ、という主張を提示した。きわめて物議をかもしような、オリジナルな主張であり、質疑もおおいに盛り上がった。たとえば、聴講していた高山守教授から、そもそも「記述的」と「規範的」という区別が鮮明になさるうのか、そうした区別をするためには背後に何らかのメタ「規範」がなければならないのではないか、といった趣旨の質問が出た。それに対してMellor教授は、「意思決定理論」が提示した結論に対して、それに従わなかったときに、結論が偽とされる場合が「記述的」な理論であって、従わなかった



Hugh Mellor 教授

行為が誤りだとされる場合が「規範的」な理論である、という仕方で区別することができる、と応答した。また、司会を務めた筆者自身が、たとえば安楽死法制定について意思決定しなければならないときには、安楽死を合法化することによって社会が幸福感を感じられるかどうかの心理的な「確率」が問題とされるはずだが、その場合でも「客観的確率」を取り入れるべきなのか、そしてそうなら、そうした場合の「客観的確率」とは何なのか、という質問をした。Mellor 教授は、そうした場合でも何らかの統計的なデータによって幸福感についての「確率」を測るべきで、そのようにする限り、「確率」は頻度にほかならず、「客観的」たりうる、という答えを与えた。このように、質疑を通じて、きわめて実り豊かな理解の深まりが達成されたと思う。終了後、同じ山上会館の別室にて懇親会が行われた。30名ほどの参加者で、Mellor 教授を囲んで、さらに議論が続けられた。実に有意義な研究学会であった。最後に、Mellor 教授から、今回の講演が日本での「意思決定理論」についての研究を促す機会になることを願っている、という挨拶をいただいた。まことに、これを機会に、多くの日本人研究者の方が「意思決定理論」に関心を抱き、そして「死生学」の展開に寄与できるに至ること、それを心より願う次第である。

鈴木岩弓教授講演研究会 『あの世』からの眼差し 遺影を飾る死生観』報告

前川健一・島園進

10月10日、東京大学文学部二番大教室にて、鈴木岩弓氏（東北大学教授）を講師とする講演研究会「『あの世』からの眼差し 遺影を飾る死生観」が行われた。鈴木氏は、宗教民俗学を専攻しており、近年は「遺影」をめぐる現代人の意識について調査を行っている。

講演では、死に関する意識を調査するために、位牌や墓など死を象徴する事物からアプローチする方法論について論じ、アジア諸地域の比較の上でも、このアプローチが有効であることが説かれた。たとえば、近年、イスラム圏でのお墓に遺影が彫り込まれるようになったといった興味深い事例が紹介された。

そして、死後結婚に関わる絵馬や先祖の遺影を居間に飾るなど、死者の肖像・写真をめぐる各地の習俗を紹介し、日本ではもともと死者の似姿を残す習慣は一般的ではなかったが、次第に流行するようになり、今ではごくふつうのこととなったと論じた。

ここで、特に写真に注目し、葬儀に遺影が取り込まれていく経過を明らかにするとともに、各家庭において写真がどのように扱われているかを調査した結果をふまえ、現代人の意識の変化について論じた。たとえば、仏壇以外に遺影が置かれ、その前に水が供えられるなどの習慣が広がっていることから、死者の写真は慰霊の対象としてよりも祈願の対象として扱われており、従来のように家族で継承されるのではなく個人単位となっているのではないかと考察が示された。

質疑応答では、「日本でも近世には肖像を残す習慣はあったのではないか」「写真というメディアの特性は何か」「『遺影』という言葉そのものはいつからあるのか」「死者に祈願することは昔からあるのではないか」「諸外国との比較はどうか」など活発な質問がなされ、家族社会学的なアプローチやメディア論的なアプローチとの間で学際的な討議が進められた。現代人の日常意識に深く関わる現象であるだけに、聴衆も討議に深く引き込まれ、懇親会へと引き継がれた。



ワークショップ「生命科学とスピリチュアリティ ～生命倫理への新しいアプローチ」報告

島 蘭 進



スタンフォード大学教授でブッシュ大統領の生命倫理諮問委員会の委員である、ウィリアム・ハールバット教授を招き、2003年10月29日、神田学士会館において、町田宗鳳教授(東京外国語大学)の司会のもと、「生命科学とスピリチュアリティ」をめぐるワークショップが行われた。まず、ハールバット氏が、現在、世界の生命倫理の焦眉の問題の一つとなっている人の胚の研究利用について、それを慎まなければならない理由について基調講演を行った。

人間生物学(human biology)を専攻するハールバット氏だが神学の学位をもち、障害者の子供を育てて来られた経歴をもっている。現在、イギリスでは人のクローン胚を作って、きわめて小さい段階ではあれ、人体の形状がおぼろげに浮かび上がってくる(原始線条が形成される)14日目段階の胚を治療目的の研究に利用することを是認している。だが、多くの国ではやがて人となる存在の研究利用に対して反対論が根強い。ブッシュ大統領の生命倫理諮問委員会では、4年間のモラトリアムをもうけ、その間に議論を深めることを提起した。

ハールバット氏は14日目をもって決定的な区切り目とし、それ以前の段階を人ではない、それ以後は人であるとする議論が恣意的なものであるとし、人のいのちは発生の最初の段階から連続的なものであるとする。そして、このように生命の連続性を尊び、研究利用に慎重である立場は、科学的な厳密性を尊ぶことに由来するとともに、人の生命の尊厳を重んじるスピリチュアリティに根ざしたものであるとも論じた。

これを受けて、宗教学や人類学や医学を専攻する日本の研究者(加藤真三、島蘭進、上田紀行、鎌田東二、樋野興夫の諸氏)が、こうした問題を論じる場合にスピリチュアリティがどのように関わってくるのかについて、さまざまな立場から発言を行った。宗教が異なり、文化が異なると生死の考え方も異なってくる。特定の宗教的信仰をもつかどうかによっても判断は変わるかもしれない。人類が共通の倫理的基準を分かちうるかどうか問われているが、倫理的基準の背景となるかもしれない、スピリチュアリティを想定できるのか、もし想定できないとすれば、どのようにして合意に近づいていくことができるのか論じられた。フロアからの質問も活発で熱気を帯びた討議となった。



なお、このワークショップは東京外国語大学総合文化研究所と共催で行われた。東京外国語大学の町田宗鳳教授が主宰する「いのちの研究会」のメンバーも多数、参加されたことを付け加えておきたい。

事業推進担当者

(拠点リーダー)

島園 進 <宗教学>

(第一部会 : 死生学の実践哲学的再検討)

竹内 整一 <倫理学・世話人>

熊野 純彦 <倫理学・世話人>

松永 澄夫 <哲学>

関根 清三 <倫理学>

一ノ瀬 正樹 <哲学>

榊原 哲也 <哲学>

(第二部会 : 生と死の形象と死生観)

小佐野 重利 <美術史・世話人>

木下 直之 <文化資源学>

後藤 直 <考古学>

(第三部会 : 死生観をめぐる文明と価値観)

下田 正弘 <インド哲学・世話人>

多田 一臣 <国文学>

市川 裕 <宗教学>

池澤 優 <宗教学>

(第四部会 : 生命活動の発現としての人間観の検討)

横澤 一彦 <心理学・世話人>

立花 政夫 <心理学>

林 徹 <言語学>

赤林 朗 <医療倫理学>

甲斐一郎 <健康科学>

西平 直 <教育学>

『死生学研究』 2003年秋号(平成15年11月25日刊)

目次

- 島蘭 進 「死生学試論(二) 加藤咄堂と死生観の論述」
末木文美士 「自殺考 南条あやのために」
津曲 真一 「チベット人の死生観 『死を欺く』儀式と三つの生命」
高桑枝実子 「死と挽歌 『万葉集』挽歌表現の考察」
野村真依子 「死者への期待 モワサックの例」

シンポジウム「死生学と応用倫理」報告

- 島蘭 進 「いのちの始まりと死生観」報告
島蘭進・竹内整一 主旨
トニー・ホープ 「生命の始まりと非同一性問題」
J・サヴァレスキュ 「合理的道徳、新しい遺伝学そして人格」
出口 顕 「生殖医療技術と現代家族」
荻野 美穂 「先端生殖技術とフェミニズムのディレンマ」
島蘭 進 「個としてのいのち・交わりの中のいのち」
八幡 英 幸 「胎児は私たちにとってどのような存在か」
立岩 真 也 「現れることの倫理」
「いのちの始まりと死生観」個別討論ならびにコメント
「いのちの始まりと死生観」総合討議

ワークショップ「仏教における死生観」報告

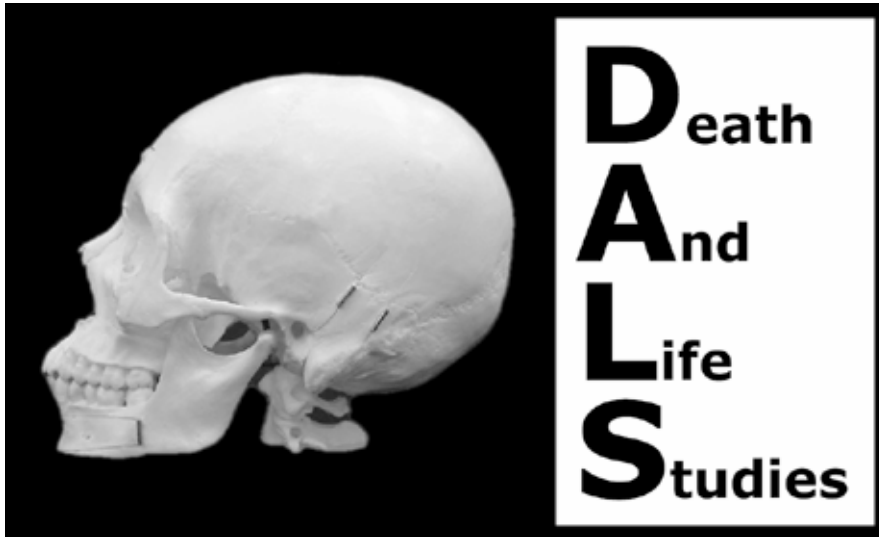
- ジャックリーヌ・ストーン 「仏教の死生観」
末木 文美士 主旨「仏教における死生観」

フィレンツェ・シンポジウム報告

- サルヴァトーレ・セッティス 「閉会の辞」
浦 一章 「恐るべきシンメトリー ダンテの読者、挿絵画家としてのブレイク」
長島 弘明 「日本における『地獄』イメージの流布 『往生要集』の影響」
小佐野 重利 「洋の東西の美術と思想にみられる死後の世界観」からの寄稿

- 麻生 享志 「たばこの害と『QOLの倫理学』 医療経済学をとりまく四つの視点」
杉木 恒彦 「インド後期密教における'死兆'の歴史的展開」
鈴木 健郎 「気の世界内における死の克服の一類型としての『内丹』(『陽神』)」
北沢 裕 「メント・モリの物語の考察 西欧中世と現代の死の『概念』の検討」

一般への市販は、されません



「DALIS ニュースレター」

第4号

平成15年12月1日発行

東京大学大学院人文社会系研究科

21世紀COE “生命の文化・価値をめぐる「死生学」の構築”

責任者 島蘭 進

TEL & FAX 03-5841-3736